

6 定置漁業漁海況の問題

宇 田 道 隆 (東海大学海洋学部)

昭和46年の冬2月5、6日久々に相模湾奥の米神、小八幡漁場方面に寒ブリ3万何千尾の大漁があった。やはり「サキジオ」の急潮があったため、水温も2月2日の13°Cから同5日の15°Cに急昇した。大島東側から北々西に黒潮分派が突入して来たので、湾奥深くブリ大群が襲来したため不漁続きの近年に珍しい大漁であった。

黒潮分派が湾内に急に流入したためブリが追いこまれて定置網にはいったのである。

ブリは沿岸の陸棚縁近くに沿って南下回遊するから、標識放流試験結果でみるように再捕率が高く、従つて漁具の漁獲性能が高く、乱獲の傾向が強くなつて来つつある。

しかしながらブリ漁獲を支える資源量には変動があり、最近上向きの傾向が全国的に出て来たようである。ブリは主産卵場たる東シナ海から資源が補給される。三陸沿岸漁況(春夏)と日本海漁況(秋冬春)と相関のあるのは当然である。また黒潮及び対馬暖流に乗つて「モジャコ」のようなブリ稚魚が大量に春夏輸送されて北方水域へ来る。これを利用するのが「ハマチ」養魚であり、栽培漁業として各地で盛んであり、奨励されてもいる。だが、アジ、サバを約10倍も切り刻んで餌として与え、値の高い高級魚としての出荷を目指すこと自体に動物蛋白増産の見地から問題があり、さらに成熟年齢前にとり上げて出荷し、再生産の機会を与えない今のやりかたに大きな疑問が残る。再生産のためのハマチ問引放流20%といったものを義務づける法令的措置がブリ漁業永続のために必要であろう。

日本の漁業生産を支配する卓越魚種にはこれまで、ニシン→マイワシ→カタクチイワシ→イカ→サンマ→アジ→サバといつたぐあいに、交代が次々に見られて来た。近年カツホ、マグロ類の資源が、しだいに北上の量を増し、マグロ幼魚(シブワ、ヨコワ、クロメジなど)が多くとれ出した。これは確かに好い傾向である。ブリ豊漁時代には黒潮分派の強盛な湾内流入に伴い、「急潮現象」も対応的に多く出現し、それは低気圧のような気象擾乱の北東→東方移動に伴うものが多かつた。大正13年ごろ、昭和8.9.10.1.13年ごろ、昭和27.28年ごろ定置網に大被害をもたらした急潮が頻発した。またこれと共に気象擾乱、黒潮変動にも明らかに回帰的な変動がみられた。黒潮が八丈島の方から北上して外房の南端につかかかるような流路パターンが不安定な相模湾流動を起すと共に、低気圧通過に際して沖合から湾奥へ突入するような急潮現象のもとになる。また沖合のS型流路パターンは大冷水塊の存在とその位置に結合して現われる。冬季温帯性低気圧(「台湾坊主」を含む)の頻来はその低気圧コースが黒潮乃至日本列島と並行して東遷し来时最も有効に働らく。これは結局気象学的にはシベリア高気圧からの「吹き出し」の強烈な冬の季節風が日本南海寒帯前線上に生じた低気圧であり、大きいえば地球をとりまくジェットストリームのパターンとも関連する。ともかくも周期的

述の省力効果は1台3人以上の能力を持っていると考えられる。第二に網の磨耗は心配する程の事もなく、又特に補強する必要もない。第三に46年2月5日の鱒13,000尾の揚網にも締出しから最後まで使用、緩急自在の網起しを行なうことが出来た。第四に事前の整備により陣張り締出しの場合でも使用可能である。第五に機械駆動が全体的に危険がなく安全度の高いものであった。

以上のような結果であるので、将来計画として来年度の鱒網漁業で更に1隻1台方式で2台追加装備することとした。